

# 防災の視点を取り入れた 中学校技術・家庭科（家庭分野）の教材開発

黒光貴峰\*・西尾幸一郎\*\*・増留麻紀子\*\*\*・柴田晃宏\*\*\*\*

(2022年11月16日 受理)

Teaching Material Development of Junior High School Home Economics Referring  
to Some Viewpoints of Disaster Prevention

KUROMITSU Takamine, NISHIO Koichiro, MASUDOME Makiko and SHIBATA Akihiro

## Abstract

The main purpose of this study is to improve the teaching methods of home economics and disaster prevention. Specifically, this study will organize the learning contents of home economics in the light of the goals of home economics and disaster prevention education, also trying to develop the teaching materials of home economics, including the perspective of disaster prevention. The research methods are as follows: 1) selections of learning contents in developing teaching materials (research period: 2013), 2) comparisons of the home economics evaluation criteria with the goals of disaster prevention education (2014), 3) developing teaching materials (2015), and 4) verification of the effectiveness of the developed teaching materials (2016).

The main characteristics of the developed teaching materials are as follows: 1) teaching materials accomplishing not only the targets of disaster prevention education, but also the evaluation criteria for residential life of junior high school technology and home economics (the field of home economics), 2) teaching materials allowing students without disaster experiences to be able to visualize the damage, 3) teaching materials allowing students to regard the disaster as their own serious problems, being able to predict actual dangers during the disaster, and 4) teaching materials leading students to take active and positive safety actions.

**Keyword** : Home Economics, Disaster Prevention, Housing field, Teaching Material Development

---

\* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 准教授

\*\* 山口大学教育学部 准教授

\*\*\* 鹿児島大学 理工学域工学系 理工学研究科（工学系）助教

\*\*\*\* 鹿児島大学 理工学域工学系 理工学研究科（工学系）准教授

## 1. はじめに

甚大な被害をもたらした東日本大震災から 10 年が経過した現在、学校教育における防災教育の課題として森本 (2021) は、時間の経過とともに震災の記憶が風化し、学校における防災教育の取組の優先順位が低下することの危惧を指摘している。重ねて、日本では首都直下型地震や南海トラフ巨大地震の発生が懸念されているとともに、近年は気象災害の激甚化・頻発化により、防災教育の充実が喫緊の課題であると指摘している。

家庭科と防災の関連については、末川ら (2017)、大橋ら (2019) が、家庭科の教科書の記述内容の変遷から家庭科の防災教育に関する分析を行っており、古くから防災に関連する内容が取り扱われていること、阪神淡路大震災、東日本大震災を契機に内容の充実が図られていることの報告が行われている。そのため、先行研究においても、高木 (2017) が、小学校家庭科における防災教育の視点から学ぶ授業内容の検討や、小林ら (2017) が、中学校家庭科における「災害時の食」の授業開発と有効性の評価、末川ら (2018) が、消費生活の内容における防災学習の検討、永田ら (2019) が、中学校家庭科衣生活の内容における防災リュックの制作の実践を行っており、家庭科という教科の特性に合わせて防災教育の充実に努めている。一方で、小林ら (2019) は、全国の小・中・高校の家庭科教員を対象とした防災・災害に関する食教育の意識と実態を明らかにしており、必要性は高いという回答を得ながらも、実際の学習状況は必ずしも高い結果になっていないといった課題も報告されている。

そこで、本研究では、家庭科教育の指導の充実を図るとともに、重ねて、防災教育の指導の充実を図ることを目的としている。具体的には、家庭科教育と防災教育の目標を照らし合わせ家庭科の学習内容を整理し、家庭科における防災の視点を取り入れた教材開発を行うことを目的としている。

## 2. 方法

研究方法は、(1) 教材開発を行う学習内容の選定 (調査時期 2013 年)、(2) 家庭科の評価規準と防災教育の目標の照らし合わせ (2014 年)、(3) 教材化 (2015 年)、(4) 開発した教材の有効性の検証 (2016 年) である。具体的には、(1) は、近年、開発されている防災教育関連の教材と学習指導要領解説の分析、(2) は、(1) より選定した内容の評価規準と学校教育における防災教育のねらいの確認、(3) は、(1)、(2) より得られた視点を踏まえた教材化、(4) は、開発した教材を教育現場で実施し、授業者 (教員) にはヒアリング調査を、学習者 (生徒) にはアンケート調査を実施した。

## 3. 結果

### (1) 教材開発を行う内容の選定

防災教育に関連する教材としては、教科書会社が市販している DVD 教材、行政 (総務省) が作成している防災危機管理 e カレッジ、研究機関が開発した防災シミュレーションゲーム「クロスロード」、などがみられる。学校における防災教育の展開例としては、自然災害や防災の写真、ビデオ、

DVD といった ICT 教材の活用が行われている（文部科学省, 2013）。東日本大震災以降、学校教育における防災教育のあり方としては、教科等の有機的な関連が図られるように、関連する教科等の内容が整理されて指導の充実が図られた。しかし、教育現場の実態としては、学校教育における防災教育の必要性は認識しているものの、防災教育の充実に向けては、「費やす時間が十分に取れない」、「適切な教材がない」等の課題があげられている（黒光, 2013）。また、生徒の実態としては、災害への不安感を持っているものの日頃から災害時の行動を考えている者は少ない現状がみられる（黒光, 2015）。学校教育で防災教育を行なうことの必要性を高いと感じている一方、災害を経験したことがない者にとっては、災害時のイメージがつきにくいとともに、自分自身の身近な問題として捉えにくいといった課題が見受けられた。

## (2) 家庭科の評価規準と防災教育のねらいの照らし合わせ

学校教育における防災教育のねらい等は、「生きる力」を育む防災教育の展開で示されており、防災教育として必要な知識や能力等を児童生徒に身に付けさせるためには、発達段階に応じた系統的な指導の必要性、すなわち、学校段階における目標が示されている（表 1）。

表 1. 学校教育における防災教育のねらい

	知識、思考・判断	危険予測、主体的な行動	社会貢献、支援者の基盤
全体	ア 自然災害等の現状、原因及び減災等について理解を深め、現在及び将来に直面する災害に対して、的確な思考・判断に基づく適切な意志決定や行動選択ができる。	イ 地震、台風の発生等に伴う危険を理解・予測し、自らの安全を確保するための行動ができるようにするとともに日常的な備えができる。	ウ 自他の生命を尊重し、安全で安心な社会づくりの重要性を認識して、学校、家庭及び地域社会の安全活動に進んで参加・協力し、貢献できる。
中学校段階	・災害発生メカニズムの基礎や諸地域の災害例から危険を理解するとともに、備えの必要性や情報の活用について考え、安全な行動をとるための判断に生かすことができる。	・日常生活において知識を基に正しく判断し、主体的に安全な行動をとることができる。 ・被害の軽減、災害後の生活を考えることができる。 ・災害時には危険を予測し、率先して避難行動をとることができる。	・地域の防災や災害時の助け合いの重要性を理解し、主体的に活動に参加する。

学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開より

中学校技術・家庭科（平成 20 年告示学習指導要領）では、家庭分野 C 衣生活・住生活の自立の内容が、(1) 衣服の選択と手入れ、(2) 住居の機能と住まい方、(3) 衣生活、住生活などの生活の工夫の 3 項目で構成されている。(2) の内容においては、住居の機能と住まい方に関する学習を通して、自分や家族の住空間に関心を持ち、住居の基本的な機能や安全に配慮した室内環境の整え方を知るとともに、安全で快適な住まい方を考え、具体的に工夫できるようにすることがねらいとされている。

表 2. C 衣生活・住生活と自立 (2) 住居の機能と住まい方の評価規準に盛り込むべき事項

生活や技術への関心・意欲・態度	生活を工夫し創造する能力	生活の技能	生活や技術についての知識・理解
・安全で快適な室内環境の整え方と住まい方について関心をもって学習活動に取組、住生活をよりよくしようとしている。	・安全で快適な室内環境の整え方と住まい方について課題を見つけ、その解決を目指して工夫している。		・住居の機能について理解し、安全で快適な室内環境の整え方と住まい方に関する基礎的・基本的な知識を身に付けている。

評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（中学校 技術・家庭）より

また、評価規準としても、室内の安全について、自然災害を含む家庭内の事故やその原因について考え、災害への備えや事故の防ぎ方などの安全管理の方法が分かり、安全な住まい方の工夫ができるようにすることが示されており、学校教育における防災教育の中学校段階のねらいと重なる部

分がみられる。そこで、それらを踏まえ、本研究では、中学校技術・家庭科（家庭分野）C衣生活・住生活の自立の住生活の内容の指導計画を立案した（表3）。

表3. 指導計画（全7時間）

時数	学習内容	指導内容	関	工	技	知
1	住まいのさまざまな役割	住まいの基本的なはたらきと、その役割を理解させる。	○			○
1	共に住まう	住まい空間と家族の生活行為との関わりについて考えさせる。	○			
1	住まいの安全対策	家庭内事故の種類とその原因を理解させ、安全を考えた住まい方を工夫させる。	○	○		○
2	災害への備え <b>安全な住まい方の工夫</b>	安全な住まい方を考えさせたり、非常時の備えに必要なものを考えさせたりする。	○	○		○
1	健康で快適な室内空間を考えよう	健康で快適な室内環境の条件を知り改善の方法を考えさせる。	○			○
1	よりよい住生活を目指して	家族が安全で快適に住むための室内環境について課題を見つけ、改善の方法を考えさせる。		○		

### (3) 教材化

住生活の内容は、取り扱う対象が大きいため教材を教室に取り入れるのが難しい、食生活や衣生活の内容に比べて実習・演習が難しいという課題が見られる。そのため、教材化に向けては、教室で使用できる教材、実習・演習として学べる教材（食生活における調理実習、衣生活における被服実習のような、住生活における住まい方実習としての確立を目指した）の開発を行った。そして、(1)、(2)を踏まえ、教材化に向けては、Ⅰ中学校技術・家庭科（家庭分野）の住生活の評価規準とともに防災教育のねらいも達成できる教材、Ⅱ災害を経験したことがない者でも被害をイメージできる教材、Ⅲ自分自身の課題として捉え災害時の危険を予測できる教材、Ⅳ主体的に安全な行動をとることにつながる教材の開発を行った。具体的な対応としては、Ⅰについては、C(2)の評価規準（表2）を基本とし、学校教育のねらい（表1）も達成できるように、Ⅱについては、災害時の被害を視覚化できるように、Ⅲについては、生徒の身近なものを取り上げ、平時（災害前）から災害時（災害後）へと時間的な経過がみえるように、Ⅳについては、学習したことが家庭で実践できるような教材化の検討を行った。

その結果、具体的に開発した教材は、8畳の部屋と、ベッド、机、椅子、棚など一般家庭が所有している家具を、縮尺10分の1で作成した模型教材（写真1）である。自然災害を含む家庭内の事故やその原因、事故の防ぎ方や災害の備えなど住生活上の安全管理の方法について、個人やグループで学習できる教材（写真2, 3）となっている。教材の材料は、軽量かつ安全な建築模型等で使用されているスチレンボードで、部屋を7mm、家具を3mmのスチレンボードで作成し、グループ活動ができるよう全10セットの模型教材を作成した。

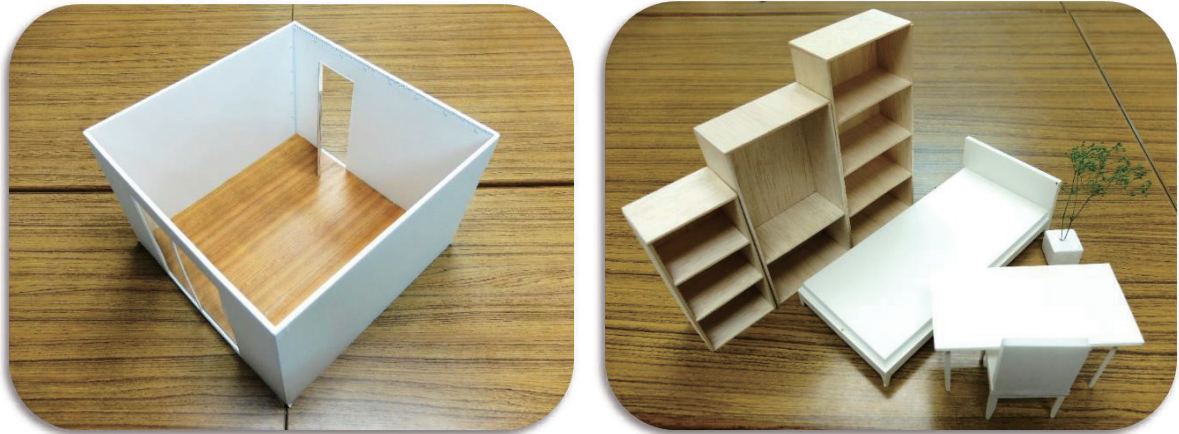


写真1. 開発した模型教材：8 畳の部屋と家具（縮尺 10 分の 1）

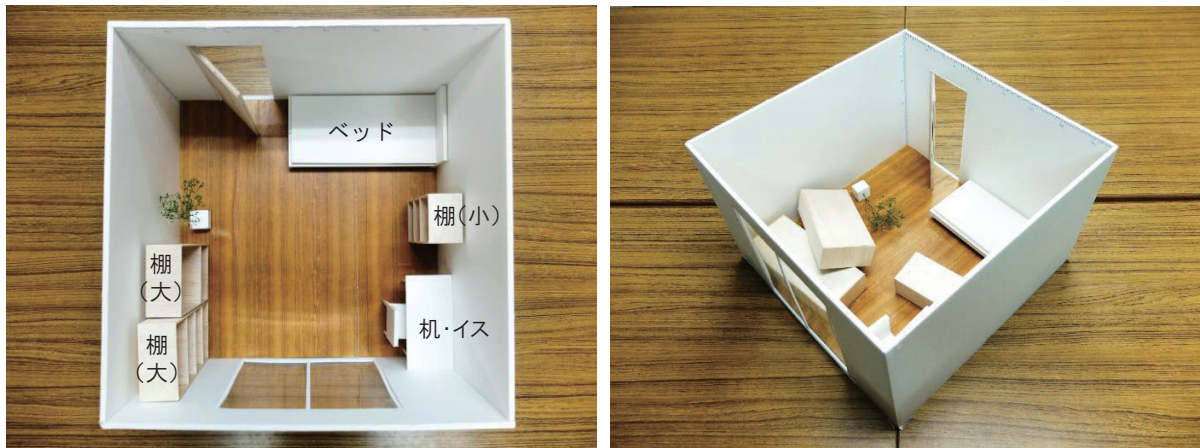


写真2. 防災の視点をおさえている配置例<sup>注1)</sup>

注1) 寝ているところに家具が倒れてくる危険性が、出入り口も塞がれる危険性が少なく、脱出経路も確保できる。



写真3. 防災の視点がおさえられていない配置例<sup>注2)</sup>

注2) 寝ているところに棚が倒れてくる危険性や出入り口が棚によって塞がれ脱出経路が確保できていない危険性がみられる。

教材の特徴は、家具を自由に動かしながら自分が考えた箇所に配置（写真4）する、グループで使用（写真5）することで、他の人の意見を取り入れながら配置（写真6）することができ、家具の配置を考える中で、安全な住まい方の視点を学習できる教材となっている。また、縮尺のイメージが付きやすいように、縮尺10分の1の中学生の人体モデルを作成するとともに、配置以外での対策、例えば、地震対策の関連器具や、その他安全に住まうための工夫については、付箋を用いて表現（写真7）することで対応を行った。模型教材と合わせて、電子黒板や書画カメラなどのICT機器を活用（写真8）することで、説明、発表の充実も可能である。



写真4. 家具を自由に動かしながら考えた箇所に配置する様子 写真5. グループでの活用の様子

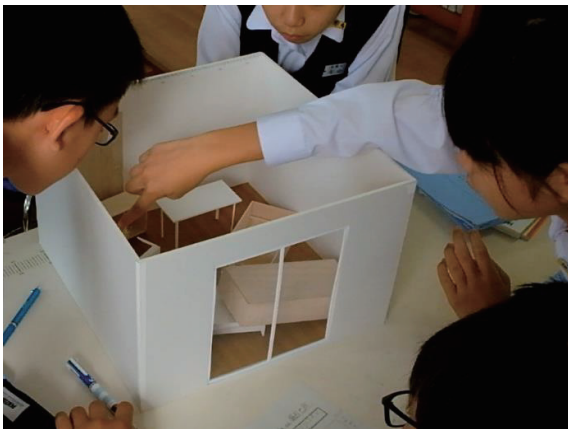


写真6. 他の人の意見を取り入れながら安全に配慮した室内環境の整え方を考える様子

写真7. 縮尺10分の1の中学生の人体モデルと付箋の活用



写真8. ICTの活用の様子

#### (4) 開発した教材の有効性の検証

開発した教材の有効性の検証を行うために、教育現場で実践した後、1) 授業者である教員に対してはヒアリング調査を、2) 学習者である生徒に対してはアンケート調査を行った。

##### 1) 教員からみた教材の有効性

調査対象は、実際に授業を担当した20代・教育歴3年、30代・教育歴10年、40代・教育歴20年の3名の教員である。調査内容は、模型教材を使ってみての感想、模型教材への要望、である。

模型教材を使ってみての感想については、「模型を用いることで住生活をよりよくしようとする考えが視覚化されて、学習のイメージがつきやすかった、模型教材とICTを効果的に活用することで、生徒の意欲や関心が高まった(20代教員)」、「模型を用いることで生徒たちが高い関心をもって学習に取り組んでいた、グループ活動が活性化し言語活動の充実や思考の深まりが見られた(30代教員)」、「模型を使用した授業は生徒の感想から見ても、とても印象深かったことが伺えた、家具の配置や倒れ方など様々な実験を視覚化しながら試すことができた(40代教員)」といった回答がみられ、どの年代の教員からも教材を評価する回答が得られた。

模型教材への要望としては、「模型教材が複数あることでグループ活動等の充実につながったが、教材を保管するための対応(場所等の確保)が必要であった(20代教員)」、「模型教材を何度も使用していると、壁が外れたり家具が壊れたりするため教材の修繕が必要であった(30代教員)」、「模型教材によって住生活の内容を視覚的にイメージさせることができたので、安全な住まい方の学習だけでなく、他の内容の学習にも活用できるようにしてほしい(40代教員)」といった回答がみられた。

##### 2) 生徒からみた有効性

調査対象は、授業を受けた生徒150名である(性別:男性76名、女性74名、学年:1年生72名、2年生78名)。調査内容は、学習を通して、あなた自身の安全な住まい方への意識は高まったか、あなた自身の住生活への興味・関心は高まったか、模型教材を使った学習について、授業を受けての感想、である。

授業後に、学習を通しての安全な住まい方への意識の高まりを聞いたところ、「高まった(31.3%)」、「まあ高まった(62.4%)」、「あまり高まらなかった(4.7%)」、「高まらなかった(1.3%)」との回答が得られ、9割以上の者が高まったと回答した。

また、授業後に、住生活への興味・関心が高まったかを聞いたところ、「高まった(30.7%)」、「まあ高まった(58.7%)」、「あまり高まらなかった(8.7%)」、「高まらなかった(2.0%)」との回答が得られ、8割以上の者が高まったと回答した。

模型教材を使った学習に対して、①授業に意欲的に取り組めた、②学習内容への興味・関心が高まった、③学習内容への知識・理解が深まった、④学習課題を自分なりに考えて工夫できた、⑤グループ内での話し合いがしやすかった、⑥他の人へ自分の意見を伝えやすかった、⑦発表しやすかった、⑧学習内容を具体的に考えやすかった、⑨授業が楽しいと感じた、⑩このような授業をもっと受けたいと思った、という設問を設け、5件法(全くそう思わない1点、そう思わない2点、どちらともいえない3点、そう思う4点、非常にそう思う5点)で回答を得た(表4)。

表4. 模型教材を使った学習に対する学習者の意識

	全体 (150票)	性別		学年	
		男性 (76票)	女性 (74票)	1年生 (72票)	2年生 (78票)
① 授業に意欲的に取り組めた	4.31 (0.62)	4.28 (0.64)	4.34 (0.60)	4.25 (0.69)	4.36 (0.56)
② 学習内容への興味・関心が高まった	4.18 (0.67)	4.18 (0.71)	4.18 (0.63)	4.15 (0.66)	4.21 (0.67)
③ 学習内容への知識・理解が深まった	4.26 (0.62)	4.22 (0.60)	4.30 (0.64)	4.18 (0.61)	4.33 (0.62)
④ 学習課題を自分なりに考えて工夫できた	3.93 (0.83)	4.01 (0.84)	3.85 (0.82)	3.78 (0.92)	4.08 (0.72) *
⑤ グループ内での話し合いがしやすかった	4.17 (0.85)	4.14 (0.89)	4.19 (0.82)	3.89 (0.90)	4.42 (0.73) ***
⑥ 他の人へ自分の意見を伝えやすかった	4.07 (0.85)	4.04 (0.81)	4.11 (0.89)	3.92 (0.87)	4.22 (0.80) *
⑦ 発表しやすかった	3.92 (0.85)	3.89 (0.76)	3.95 (0.93)	3.96 (0.85)	3.88 (0.85)
⑧ 学習内容を具体的に考えやすかった	4.23 (0.72)	4.24 (0.75)	4.23 (0.69)	4.18 (0.76)	4.28 (0.68)
⑨ 授業が楽しいと感じた	4.37 (0.81)	4.30 (0.85)	4.45 (0.76)	4.31 (0.83)	4.44 (0.78)
⑩ このような授業をもっと受けたいと思った	4.40 (0.79)	4.42 (0.80)	4.38 (0.79)	4.36 (0.83)	4.44 (0.77)

\*  $p < .05$  \*\*  $p < .01$  \*\*\*  $p < .001$

その結果、模型教材を使った学習に対しては、全ての項目で高い評価が得られた。性別および学年でみると、性別で有意な差はみられなかったが、学年間では、「⑤グループ内での話し合いがしやすかった ( $t(148) = 4.01, p < .001$ )」、「④学習課題を自分なりに考えて工夫できた ( $t(148) = 2.23, p < .05$ )」、「⑥他の人へ自分の意見を伝えやすかった ( $t(146) = 1.66, p < .05$ )」で有意な差がみられた。このことより、模型教材は、性別、学年間に影響なく一定の教育効果が確認された。一方で、グループ内での話し合い、自分の意見の伝えやすさは、1年生よりも2年生の方が行いやすい傾向がみられた。

授業を受けての感想を自由記述で聞いたところ、「自分の住生活を見直す良い機会となった。まだ実践できていないのでやってみたい」、「この学習を通して家庭で実践するきっかけが作れた」、「学習を通して習ったことを家で活かしていきたい」といった、学習を通して住生活をよりよくしようとする回答や、「同じ部屋で同じ家具を使っても、家具の配置を考えているかそうでないかで安全に暮らせたり快適に過ごせたり生活が変わっていくのが面白かった。自分の部屋も模様替えをして、



前より安全で清潔な感じになった。家庭科は習ったことをすぐに家で実践できるので、これからも自分なりに工夫してやっていきたい」といった安全で快適な室内環境の整え方と住まい方について課題を見つけ、その解決を目指して工夫している回答、「映像や写真では気が付かないところに注目することができた。ドア付近に大きな家具を置くと危ないことが分かった」といった安全で快適な室内環境の整え方と住まい方に関する基礎的・基本的な知識を身に付けていることにつながる回答がみられた（下線は、中学校技術・家庭科（家庭分野）C 衣生活・住生活と自立（2）の評価規準）。また、「実際に体験したことがない大地震に対して実際に起きた時にどのようになるのかがイメージしやすかった」といった災害発生のメカニズムの基礎や危険を理解する回答や、「模型を揺らしてみること、家具があんな風に倒れるとは思っていなかったので怖くなった。家具の配置にも気を付けていきたい」といった備えの必要性について考え、安全な行動をとるための判断に生かすことにつながる回答がみられた。「地震時の対策が家でしっかりとできているのか確認して安全に暮らしたい」、「どうやったら安全で快適に過ごせるのかが分かったので、将来1人暮らしをする時などに活かしたい」といった主体的に安全な行動をとることにつながる回答や「部屋だけでなくお店など他の場所ではどのような対策がとれるか知りたい」といった被害の軽減を考え備えることにつながる回答がみられた（波線は防災教育の中学校段階の目標）。

取り扱う対象が大きいため教材を教室に取り入れるのが難しい住生活の内容に対しては、「立体で見ると想像しやすかった」、「模型を使うことで自分の生活の場面に置き換えられたのでとても分かりやすかった」、「模型や視聴覚機器を用いることで、より安全で快適に過ごすために具体的に分かりやすく理解することができた」、といった回答が、イメージがつきにくい住生活の内容に対しては、「模型を使った学習は、他の人が考えたことが分かりやすく、自分の意見も発表しやすかった」、「普段、何も考えずに生活していたけれど、安全に住むために様々な工夫ができることを知った。これからの生活に活かしていきたい」、「実際に模型を揺らしてみても、家具がどのように倒れるのかが分かったので、家具の配置を考え直したり、家具を固定したりして対策をしていきたいと思った」、「グループ内で模型を使って話し合ったのがとても楽しかった」といった回答が、満足度が低い住生活の内容に対しては、「楽しかったし、分かりやすかった」、「模型を使って耐震性などを考えるのが楽しかった」、「発表しやすい雰囲気ですごく楽しかった」、「安全に住むための工夫をより深く学びたいと思った」、「実際に模型を使うことで分かりやすいし、グループでの話し合いもしやすく楽しい授業だった」、「模型を使って別の内容も学びたい」といった回答がみられた。

#### 4. まとめと考察

本研究は、家庭科教育ならびに防災教育の指導の充実を図ることを目的に、Ⅰ中学校技術・家庭科（家庭分野）の住生活の評価規準とともに防災教育のねらいも達成できる教材、Ⅱ災害を経験したことがない生徒でも被害をイメージできる教材、Ⅲ自分自身の課題として捉え災害時の危険を予測できる教材、Ⅳ主体的に安全な行動をとることにつながる教材の開発を行った。開発した模型教

材の有効性の検証を行った結果、学習効果について一定の教育効果があることが確認できたとともに、重ねて、教室内に教材を取り入れることが難しい、衣生活や食生活の学習内容に比べ実習・演習が少ない、住生活の学習の課題に対しても可能性が示されたといえる。

当教材は、平成20年時の学習指導要領で教材の開発および検証を行った。平成29年の学習指導要領の改訂においても、防災の視点は重要視されており、中学校家庭科の住生活の内容も、幼児や高齢者の家庭内の事故を防ぎ、自然災害に備えるための住空間の整え方を重点的に扱い、安全な住まい方の学習の充実が図られている。そのため、開発したモデル教材は、現行の学習指導要領においても活用することが可能であるが、今後は、現行の学習指導要領への対応を行い有効性の検証を行っていく。また、今回の有効性の検証によって得られた課題等の改善も行っていく。

具体的には、現行の学習指導要領への対応として、新しい評価規準への移行と生活の営みに係る見方・考え方の導入、学習者から見受けられた課題への対応として、学年間で差が見られたグループ内での話し合いや他の人へ自分の意見を伝える方法の充実、授業者からの要望である、防災の視点だけでなくその他の視点も学べる、教材の強度、保管の問題の解決を行い、衣生活における被服実習、食生活における調理実習、といった住生活における住まい方実習としての確立を目指していく。

## 謝辞

本研究にご協力くださいました先生方ならびに生徒の皆様に心から感謝申し上げます。

## 附記

本研究は、科学研究費補助金（若手研究（B）課題番号15K16183）による成果の一部である。

## 注

- 1) 寝ているところに家具が倒れてくる危険性や、出入り口も塞がれる危険性が少なく、脱出経路も確保できる。
- 2) 寝ているところに棚が倒れてくる危険性や出入り口が棚によって塞がれ脱出経路が確保できていない危険性がみられる。

## 引用文献

- 小林裕子, 永田智子. (2017). 中学校家庭科における「災害時の食」の授業開発と有効性の評価. 日本家庭科教育学会誌 60(2), 65-75.
- 小林裕子, 永田智子. (2019). 家庭科教員の防災・災害に関する食教育の意識と実態: 小・中・高等学校家庭科教員対象全国調査より. 日本家庭科教育学会誌 62(3), 140-149.
- 黒光貴峰. (2013). 鹿児島市の学校における防災への取り組みの実態. 鹿児島大学地域防災教育研究

センター報告書, 49-58.

黒光貴峰, 徳重礼美. (2015). 中学生の災害および防災への意識. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要 66 巻, 93-101.

文部科学省. (2021). 学校における防災教育の推進のポイント. 初等教育資料 1011, 2-5.

文部科学省. (2013). 学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開.

文部科学省. (2013). 中央教育審議会“第2期教育振興基本計画について（答申）”.

永田智子, 小林裕子, 村田晋太郎. (2019). 中学校家庭科におけるリメイク学習教材の開発ー不要になったジーンズで作る防災リュックー. 兵庫教育大学研究紀要 54, 117-125.

大橋裕子, 岡田みゆき. (2019). 家庭科の教科書における防災に関する記載の変遷. 北海道教育大学紀要教育科学編 69(2), 207-217.

末川和代, 天野晴子. (2017). 中学校家庭科の教科書記述内容の変遷からみる家庭科防災教育に関する分析的ー研究. 日本家庭科教育学会誌 6(1), 3-12.

末川和代, 天野晴子. (2018). 中学校家庭科「消費生活」にかかわる防災学習の検討ー災害関連消費生活問題及び防災ブック等の分析を通してー. 消費者教育 38, 131-142.

高木幸子. (2017). 小学校家庭科において防災教育の視点から学ぶ授業内容の検討, 新潟大学教育学部研究紀要人文・社会科学編 10(1), 283-290.